

# スペイン語の起源と発達についての覚え書

## —スペイン語以前から中世スペイン語まで—

田 林 洋 一

### 1. 序

本稿では、現代スペイン語がスペイン語（ないしはカスティーリャ語）と呼ばれる以前の存在であった（俗）ラテン語、ないしは初期ロマンス語と言うべきものから、中世スペイン語までの変遷を記述することを目的とする。なお、中世・近世スペインは各文献によって定義が様々であるが、本稿では小林（2005：6）に従って、当時のイベリア半島がレコンキスタ（国土回復運動）を達成した 1492 年までを指すことにする。いわゆる現在の「スペイン語」が歴史的・国際的に認知されたのは、アントニオ・デ・ネブリハが『カスティーリャ語文法 (*Gramática de la lengua castellana*)』を著した 1492 年というのが定説であるが、本稿ではそれ以前の年代の変化を追う。なお、スペイン語そのものが成立したのは、後述するように、サン・ミリアン註解が書かれた時代であり、それよりも古い。

さて、紙幅の制限上、本稿だけでスペイン語以前のイベリア半島の言語並びに中世スペイン語までの変化を全て追うことは不可能である。従って、網羅的に変化を追うのではなく、スペイン語以前から中世スペイン語までの変遷の全体像を概観するだけに留めることにする。

### 2. スペイン語が属する語族

スペイン語はインド・ヨーロッパ語族に属し、他のロマンス諸言語と同様ラテン語を起源とする。遠く遡ればインド・ヨーロッパ祖語を起源とするが、インド・ヨーロッパ祖語はその存在が假定されているだけの、いわば実体のない言語である。

インド・ヨーロッパ祖語を起源とする言語のうち、スペイン語が属しているイタリック語派には、同じラテン語から派生したポルトガル語、イタリア語、フランス語、オック語、ルーマニア語がある。一方、ゲルマン語派には、英語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語があり、スラブ語派にはロシア語、ポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語、ブルガリア語がある。アジアにはペルシア語（イラン）、ヒンディー語（インド）、ウルドゥー語（パキスタン）があり、少数民族の言語としてはケルト語族の諸言語（アイルランド語、ウェールズ語、ブルトン語など）がある。

インド・ヨーロッパ語族の語派への分類とその呼称には諸説あって、インド・イラン語派、アルメニア語派、トカラ語派、ギリシャ語派、イタリア・ケルト語派（スペイン語はここに属する）、バルト・スラヴ語派、ゲルマン語派があり、アルバニア語派、ヒッタイト語派もここに含むべきとの学説もある。一方、ヨーロッパにも非インド・ヨーロッパ語族は存在し、それらはバスク語、フィンランド語、ハンガリー語、コーカサスの諸言語である。

### 3. 初期イベリア半島（先史イベリア半島）の言語模様

ラテン語は紀元前 1100 年頃から、イタリア半島のラティウム地方（現在のローマ市を含む半島中央部西岸の部分に相当し、日本の四国を少し小さくした面積を持つ）で少数のラティーニー族（Latini）

によって話されていたが、ローマの版図が拡大するにつれてその使用地域が急速に広がり、前3世紀中葉にはイタリア半島全域、それ以後は半島外の地域に広がり、紀元2世紀には西は現在のポルトガルから、東は小アジアに至るローマ帝国の共通語になった。その急成長した言語の性質上、ラテン語は地域による方言差が比較的小さい。

ローマ帝国が進出してくる以前のイベリア半島には、ケルト人（北部、西部）、イベリア人（南部、東部）、ケルトイベリア人（中央部）、バスク人（ピレネー山麓）などが住み、また東部および南部の海岸地域にはギリシャ人やフェニキア人の植民地があった。

イベリア半島のイベリア（Iberia）の語源はよく分かっていない。イベリア半島の原住民をイベリア族（iberos）と仮称するが、原住民自体が単民族であった可能性は少ない。一説にはエブロ河（el Ebro）の流域に住んでいたから、というものがある。

スペインという地名の語源はスペイン語でスペインを意味するエスパーニャ（España）から来るが、これはラテン語のヒスパニア（Hispania）に由来し、更に遡るとフェニキア語のスパーン（Spān）になると言われている。スパーンの意味は、「ウサギの国」、「西北の地」、「遠隔の地」などの説がある。

イベリア半島の原住民は、小アジアに端を発し、アフリカ大陸北岸を通過して南から入ってきたとされる説と、コーカサス地方に発して北のピレネー山脈を越えて半島に入ってきたとする説がある。バスク語とコーカサス諸言語には類縁関係があるとする説もあるが、確かなことは不明である。原初イベリア語源の語として、barro（泥）、carrasca（樅）、cueto（岩山）、lavanco（野鴨）、manteca（ラード）、nava（山間の平原）、perro（犬）、tojo（ハリエニシダ）などが挙げられる。しかし、彼らが単一の言語を用いていたか、複数の言語を使用していたかについても定説はない。イベリア族の文化圏の中には、特にグアダルキビル河下流地域を中心としてタルテスス族（tartessos）があり、『旧約聖書』列王記によれば、アルガントニオ王のもと、華やかな文化を誇る王国を樹立していたとされる。

その後、フェニキア人が半島南岸に入り、紀元前1100年頃までにGadir（現Cádiz）の町を作り上げた。Gadirはフェニキア語で「城壁に囲まれた内部」を意味する。また、フェニキア人は、「商館・工場」を意味すると言われるMálaka（現Málaga）も作り上げた。半島南岸でフェニキア人と争って敗れたギリシャ人は東海岸を植民し、それぞれLucentum（現Alicante）、Rhode（現Rosas）、Emporion（現Ampurias）を作り上げた。

更に、中部ヨーロッパからのリグリア人（ligures）移住説も唱えられている。ソリヤ、サラゴサ、クエンカ、アビラの諸県にLangaという地名があるが、これが北イタリアのピエモンテやロンバルディア地方のLangaと関係があるという説であるが、確証はない。リグリア語源の普通名詞として、gándara（低地）、lama（底泥）が挙げられる。

ケルト人はドイツ南部に発し、ガリアを経て、紀元前7世紀頃にイベリア半島に入った。ケルト人は原住民のイベリア民族と混血した結果、それ以後、半島はケルト・イベリア（Celtiberia）とも呼ばれるようになった。従って、ケルト語が原初イベリア語に与えた影響は大きい。ケルト語で「要塞」を意味するbrigaから、現ベタンソス（Betanzos）のBrigantiumという町が生まれ、Brigaetiumから現ベナベンテ（Benavente）、Segobrigaから現セゴルベ（Segorbe）が生まれた。また、ケルト語で「大変（背が）高い」を意味するUxāmaからOsmaという地名が生まれた。同様に、SegisāmoからSasamón（ブルゴス県）、CartimaからCártama（マラガ県）が生まれた。ケルト語からの借用語は多いが、ほとんどがラテン語を経由しており、例えばcamisiaがcamisa

(シャツ)、capanna が cabaña (小屋)、cervisia が cerveza (ビール) となったことが挙げられる。

また、原初イベリア語の一つと目されている、非インド・ヨーロッパ語のバスク語からの借入も多く、「新しい家」を意味する Ešaberri から人名の Javier が、離宮で有名な Aranjuez は「棘」を意味する arnz から生まれている。また、同じく人名の García、Íñigo、Jimero は、それぞれバスク語の Garsea、Enneco、Xemeno に由来する。普通名詞では、vega (広野) がバスク語の ibaiko (海岸)、izquierdo (左) がバスク語の ezquerr を源としている。

ケルト族以外の印欧語族でケルト族よりも早く(紀元前 1000 年頃) イベリア半島に入ってきたとされる民族にカンタブリア族 (cántabros)、アストゥール族 (astures)、ルシタニア族 (lusitanos) などがあるが、これらの人々の言語についてはいくつかの地名以外、ほとんど何も判明していない。

紀元前 3 世紀末のイベリア半島は、フェニキア、ギリシャ、ケルトの部分的支配下にあったものの、カルタゴが優勢であった。ラテン語がイベリア半島に登場するのは、第 1 次ポエニ戦争(紀元前 264-241) でローマの兵士が半島に上陸する紀元前 250 年以降の頃である。更に、第 2 次ポエニ戦争ではローマがカルタゴに勝利を収めたが、これはイベリア半島に多大な影響をもたらした。ルシタニア人、ケルトイベリア人のローマ帝国に対する抵抗は終わらず、紀元前 133 年のヌマンシアの壊滅後も、新たな反乱はあった。その後 200 年間、ウィリアトウスによる反乱、ヌマンシアの戦争、セルトリウスによる抵抗といった、原住民による反ローマ的な動きはあったが、イベリア半島のローマ化にはほとんど影響を与えなかった。よって、口語ラテン語である俗ラテン語は、原住民の諸言語であるケルト・イベリア語を排斥することになった。紀元前 19 年、アウグストゥスによるカンタブリア人、アストゥリカ人の鎮圧によってイベリア半島のローマ化が完了する。

#### 4. ローマ化したイベリア半島と初期ロマンス語への影響

ローマの支配が及ばなかった半島北西部のアストゥリアス・カンタブリア (Asturias-Cantabria) 地域が最終的にローマに帰属したのは帝政時代に入ってから紀元前 19 年のことである。その後、ラテン語の半島への本格的な普及が始まったが、既に紀元前 2 世紀にはポルトガルを含むローマ支配地域での共通語として使用されていた。しかし、その結果、先住民の言語はバスク語を除いて全てラテン語によって駆逐される。ラテン語化はイベリア半島南部と東部で特に急速に進展したと言われている。一方、北部のバスク語はローマ人が先住民の激しい抵抗に遭い、完全支配を達成できなかった。476 年の西ローマ滅亡までに、バスク地方を除く半島のほぼ全域にラテン語が定着した。

ラテン語はローマの支配が続く間に変容し、古典ラテン語(教養ラテン語)と俗ラテン語(民衆ラテン語)<sup>1</sup>に分離した。すなわち、文学の発生によって文語という概念が生まれた瞬間、主に教育機関で教わる古典ラテン語と、中産階級や庶民階級によって会話に用いられる俗ラテン語との分離が始まった。しかし、両者は完全に分離したものではなく、共存し併用される、いわゆるダイグロシア(2言語変種使い分け)の状態が続いていた。すなわち、ローマ時代以降の南欧社会も威信ある共通文語ラテン語と地域的口語ラテン語を数世紀併用していた状態であった。

ラテン語の語源として挙げられるスペイン語は多岐にわたる(例えば derecho (右) など基本的な語彙もある)。現代スペイン語の ancho (広い) と amplio (広範な) はラテン語の amplius から来ている。更に、estrecho (狭い) と estricto (厳密な) は、やはりラテン語の strictus に由来する。前者(ancho と estrecho) は、口語ラテン語からの自然変化形であり、後者(amplio と estricto) は文語ラテン語からの借用形である。民衆語の方が語形はラテン語から離れているが、意味は日常的で具体

的なものが多い。一方、教養語の語形はラテン語に近いが、意味はやや学問的で抽象的なものが多い。

古典ラテン語はホラティウスの『頌歌』やシーザーやタキトゥスの散文として磨きあげられていったのに対し、俗ラテン語は口語であったため資料が少なく、なかなか実態をつかみにくい。しかし、ペトロニウスの口語を反映した写実主義的小説の断片や、帝国衰退期末期の作者不詳の口語による不注意な文章、碑銘、誤った表現を非難する文法家の引用などが参考になる。

俗ラテン語は、ギリシャ語に範を取り洗練を求める古典ラテン語とは対照的に、口語特有の道を歩む。統語的には、古典ラテン語で頻用されていた転置法が姿を消した。また、古典ラテン語では修飾語や補語構成要素が文の内側に置かれる総合的な語順が大勢を占めていたが、俗ラテン語では順次進行的な連続語順がそれに取って代わった。また、長文の短文化傾向も見られる。

更に、古典ラテン語と俗ラテン語の間では母音体系にも違いが見られる。古典ラテン語はピッチ・アクセントを有していて、5つの母音に長短の別がある。これに対し、俗ラテン語は3世紀以降、アクセントはストレス・アクセント（強勢アクセント）を採用し、5世紀にはすでに移行が完成したと見られる<sup>2</sup>。それに伴い、長短の別が原則として開閉の別が変わった。例えば、短母音*i*と長母音*e*が混同されて*e*となり、短母音*u*と長母音*o*も混同されて*o*となった。

この母音体系の変化は、現代スペイン語にも強い影響を与えている。例えば、ラテン語の *septem* (7) はスペイン語では *siete* であるが、700 を意味する *setecientos* の *sete-* には二重母音化は起こっていない。同様に、ラテン語の *novem* (9) はスペイン語では *nueve* であるが、900 を意味する *novcientos* の *nove-* には二重母音化は起こっていない。また、語根母音変化動詞である *perder* (失う) の直説法現在形は、*pierdo, pierdes, pierde, perdemos, perdéis, pierden* となって、1人称複数及び2人称複数だけ、二重母音化が起きていない。また、*contar* (数える) の直説法現在形も、同様に *cuento, cuentas, cuenta, contamos, contáis, cuentan* と活用し、1人称複数及び2人称複数に二重母音化は起きていない。語根母音変化（二重母音化現象）の *e*→*ie* は3世紀半ば、*o*→*ue* の変化は4世紀にその例が見られる。なお、後述するサン・ミリアン註解 (*Glosas Emilianenses*) にも、*tienet* (現代スペイン語の *tiene*。語尾の *-t* はラテン語の能動相3人称単数を表す) という、*e*→*ie* と変化した単語が見られる。一方、ガリシア語やポルトガル語にはこの二重母音化現象は起きていない。

子音の変化として、2世紀以降に起こった子音の硬口蓋音化と、軟口蓋子音の前舌音化または軟音化の現象が挙げられる。例えば、*palātium* (宮殿) は現在のスペイン語では *palacio* となり、*ti* が *ci* に変化する過程で硬口蓋音化が発生していると考えられている。

更に、ローマ帝国時代には、母音の間にある子音の軟音化現象も見られる。具体的には、①二重子音の単子音化、②無声子音の有声化、③有声破裂音の摩擦音化ないしは消失、である。両唇音としては、ラテン語の *cippu* (くい) が *cepo*、*lupu* (狼) が *lobo*、*lavare* (洗う) が *lavar*、*rīvu* (川) が *río* にそれぞれ変化し、歯音としては、ラテン語の *sagitta* (矢) が *saeta*、*metu* (恐怖) が *miedo*、*vadu* (浅瀬) が *vado*、*foedu* (醜い) が *feo* にそれぞれ変化している。軟口蓋音については、ラテン語の *peccātu* が *pecado* (罪)、*cicōnia* (コウノトリ) が *cugüña*、*plaga* (傷) が *llaga*、*ligare* (結ぶ) が *liar* となる。

その他、*s* の例ではラテン語の *grossu* (厚い) が *grueso*、*ūsu* (使用) が *uso* に変化し、*m* の例ではラテン語の *gemma* (芽) が *yema*、*fūmu* (煙) が *humo* と変化している。*l* の例ではラテン語の *cabāllu* (馬) が *caballo*、*malu* (悪い) が *malo*、*n* の例ではラテン語の *pannu* (布きれ) が *pañó*、*lūna* (月) が *luna*、*r* の例ではラテン語の *ferru* (鉄) が *hierro*、*feru* (野蛮な) が *fiero* と変化して

いる。

形態面では、曲用格変化の混同と格に代わる前置詞の使用、動詞活用の一部の喪失が見られる。例えばラテン語の受身形活用 *amatur, amabatur, amabitur*（それぞれ現在スペイン語の *es amado, era amado, será amado* に当たる）が消失した。また、ラテン語には名詞・代名詞・形容詞の統語上の機能を示すための曲用（格変化）があったが、音声変化の結果、古典ラテン語の格体形は俗ラテン語では曖昧となり、5世紀頃には6格体系から2格体系（主格と対格）へと単純化した。ロマンス語の段階に入ってから、2格体系を維持した地域と、格体系を放棄した地域があり、スペイン語は格体系を放棄する道を選んだ。対格はロマンス語の中でも安定した地位を保ち、そこからスペイン語の名詞が派生したとされている。具体的には、ラテン語の *rosam* (*rosa* バラ・単数・対格) から *rosa, rosas* (*rosae* バラ・複数・対格) から *rosa, amicum* (*amicus* 友達・単数・対格) から *amigo, amicus* (*amici* 友達・複数・対格) から *amigos, formosum, am* (*formosus* 美しい・単数・男性対格, 女性対格) から *hermoso, a, formosus, as* (*formosi* 美しい・複数・男性対格, 女性対格) から *hermoso, as* が生まれた。

また、古典ラテン語は冠詞を持たなかったが、早くから指示代名詞 *ille, ipse, istè* を用いて特定の語を他の語に対立させたり、他の語から区別したりしていた。更に、数詞の *unus* は「ある…、ある種の」の意味で使われることがあった。前者は定冠詞、後者は不定冠詞の起源である。

俗ラテン語の音韻変化は動詞の活用にも影響を与えた。その結果、古典ラテン語の一部の活用形式は混同され、維持することが困難となった。例えば、接続法不完了過去と接続法完了過去は、形態上の区別が困難となった。古典ラテン語の *amare*（愛する）の接続法不完了過去は *amarem, amarès, amaret* …であり、接続法完了過去は *amā(ve)rim, amā(ve)ris, amā(ve)rit* …であるが、俗ラテン語に頻発した強勢音節の直後にある音節の脱落現象の結果、この2種類の過去形の区別は消滅した。

その他、第4活用まであった活用の種類が3種類になり、受動態の活用がなくなり、形式所相動詞（形態的には受動だが意味は能動となる動詞）が消滅し、別の単語が生まれたりした。その結果、俗ラテン語に、*esse*+完了分詞の形式が受動態の活用形式の代わりに生じ、すべての法・時制にわたってこの迂言形式が使われるようになった。現代スペイン語の *ser*+過去分詞の出発点である。更に、古典ラテン語が屈折語尾で示していた完了の意味を完了分詞+*habere/esse* によって表す方法が出現した。これは文法化するには長い時間がかかったが、最終的には現代スペイン語の *haber/ser*+過去分詞の形式として落ち着くことになる。また、「現在から見た未来」は古典ラテン語ではやはり屈折語尾で表していたが、俗ラテン語では *habere, devere, velle* の直説法現在と不定詞との組み合わせで表す傾向が強まった。スペイン語をはじめ多くのロマンス諸語では、このうち「不定詞+*habere*」を基底として未来形と過去未来形が作り出された。現代スペイン語の未来形及び過去未来形が、不定詞を基底として、それぞれ *-é, -ás, -á, -emos, -éis, -án* 及び *-ía, -ías, -ia, -íamos, -íais, -ían* をつけるのは、ここから来ている。

俗ラテン語は紀元前2世紀には今のイタリアと周辺の島々及びイベリア半島、イルリリア、マケドニア、ギリシャ、アフリカ北部、ガリア・ナルボネンシスなどに広がった。紀元前1世紀になると、小アジア、ガリア、エジプト、ドナウ川南岸地帯、アルプス山岳地帯などに広がった。各地で方言化したものの、原住民の言語を抑えて公用語としての地位を確立していった。

## 5. ラテン語以外の言語の初期ロマンス語への影響

ローマ帝国が 395 年に東西に分裂し、ゲルマン民族の大移動が起こると、409 年、イベリア半島にその第一波が侵入する。5 世紀初頭（409 年）、スエヴィ、アラン、西ゴートなどのゲルマン系民族が相次いで到来し（スペイン南部の「アンダルシア」の語源は「ヴァンダル」に由来する）、最終的に西ゴート人（visigodos）がその支配者となり、6 世紀に入って西ゴート王国が建設される。

ローマの支配が終わり、ゲルマンが進入してくるが、彼らは文化的に水準の高かったラテン語社会に同化したため言語への影響は少なく、一部の語彙の借用程度に終わった。例えば、espía（スパイ）、guerra（戦争）、guardar（見張る）、robar（盗む）といった、軍事、戦闘に関する用語が多いのが特徴である。しかし、ゴート語系の語彙は人名や地名に比較的多く残っている。例えば、Álvaro（←ゴート語の all（全て）+wars（準備した））や Fernando（ゴート語の frithu（平和）+nanth（大胆な））などである。その他、Adolfo, Alfonso, Arigimiro, Bermudo, Elvira, Galindo, Gonzalo, Ramiro, Rodrigo, Rosendo などもゴート語起源の名前である。

形態面では、「関係・所属」を表す接尾辞 -engo, -enco（英語の -ing に相当）が残るだけである。例えば、realengo（王室領の）、ibicenco（イビサ島の）などである。

711 年にタリク（「ジブラルタル」の「タル」は彼の名から来ている）を総司令官としてイスラムが北アフリカから進入を開始し、西ゴート王国は滅亡する。西ゴートの王位は貴族と王との対立や、杜撰な王位選挙制のために非常に不安定であったことから、イスラムの侵攻を容易にしたと推定されている。イスラムは数年でカンタブリア山脈以南の地域を支配下においた。

イスラムの支配は被征服者に対して寛大だったため、西ゴート時代の俗ラテン語（イベリア・ロマンス語）は消滅せず、一部のイスラム教徒も俗ラテン語を使用した。半島に形成されたイスラム世界はアル・アンダルスと呼ばれるが、この社会はアラビア語とロマンス語の 2 言語併用が 13 世紀まで続いていた。更に、表記はアラビア文字、文法構造はロマンス語、語彙は両者の混合というアラビア語混じりのスペイン語である「モサラベ語（mozárabe）」が形成されるまでに至った。モサラベ語は現在使用されていないが、ハルチャ（Jarcha）と呼ばれる特殊な韻文形式、イスラム教徒側の文献や碑文などに断片的に残り、言語史研究上注目すべき資料を提供している。

アラビア語は音韻面ではロマンス語にほとんど影響を与えなかったが、形態面、統語面、語彙面では多大な貢献を残している。形態面では、アラビア語の冠詞 al を伴って、そのまま無変化で維持された語（alboroto（騒ぎ）、alborotar（騒ぐ）など）、al- の l が後続の歯音に同化した語（azumbre（アスンプレ [液量の単位]）、adarga（楕円形の盾）など）がある。また、アラビア語の形容詞に用いられる接尾辞 -i は、アラビア語系の地名形容詞や固形容詞の接尾辞として用いられるようになった。例えば、muladí（イスラム教に改宗したキリスト教徒の）、marroquí（モロッコの）、alfonsí（アルフォンソの）などである。

統語面では、男性優位の表し方である、男性複数形で男女一対を表す方法がスペイン語に取り入れられた。例えば、los padres（両親）などである。また、意味の面では、「～の子」という表現がスペイン語に取り入れられるようになった。例えば、hijo de algo→hijodalgo→hidalgo（郷士）など。イスラム教の宗教上の慣習や日常生活上の表現も、そのままロマンス語に置き換えられて残っている。例えば、Que Dios guarde a usted muchos años（神が長年にわたりあなたを守護されんことを→敬具）、Si Dios quiere（もし神が望むなら→事情が許せば）、Dios le ampare（神があなたをお守りになるように→神のご加護を）などの表現は、アラビア語から入ってきた発想法と言える。

アラビア語は、スペイン語の構造は変化させなかったものの、比較的多くの語彙の借用が行われた。

例えば、azúcar (砂糖)、algodón (綿)、zanahoria (人参)、aduanas (税関)、cero (ゼロ)、hasta (まで)、ojalá (願わくば) など、基底語 800 ~ 900 語、派生語も含めると約 4000、スペイン語の総語彙数の約 3 パーセントにも上ると言われている。アラビア語から直接入ってきた語彙もあるが、サンスクリット語源 (ajedrez (チェス))、ペルシャ語源 (naranja (オレンジ))、ギリシャ語源 (alquimia (錬金術)) の語がアラビア語を経由してロマンス語にもたらされたケースもある。また、アラビア語とロマンス語の要素が組み合わさってできた地名がある。例えば、Guadalcanal (アラビア語 Guadal (河) とロマンス語 canal (水路)) など。

この時期がスペイン語の形成時期ともいえ、ローマ帝国という単一共通言語の使用基盤を失い、分断された各地の俗ラテン語は時とともに方言化を進めていく。その結果地方格差の大きくなった各地の俗ラテン語はラテン語というよりはロマンス語と呼ばれるべき段階のものになった。例えば、715 年のトゥールの宗教会議では、司祭に各地域のロマンス語でミサを執り行うという要請がなされるなど、かつての言語共同体における唯一の伝達手段としてのラテン語は消滅していく。限られた領域で用いられた中世ラテン語の形式を低ラテン語 (bajo latín) と呼ぶが、これは古典ラテン語を指し示す言葉で、ロマンス語に決定的な変化を及ぼす要因にはなりえなかった。

10 世紀半ばから徐々に強大化し始めたカスティーリヤ王国は西のレオン王国を吸収し、レコンキスタの主導権を掌握していた。半島東部では 12 世紀にカタルーニャとアラゴン王国が統合してアラゴン連合王国が誕生し、地中海側の領土を制圧していた。

## 7. イスラム教支配下のイベリア半島の言語

スペイン語の成立に甚大な影響を与えたのが、13 世紀、el Sabio (賢王) と呼ばれたアルフォンソ 10 世である。彼は、トレドの宮廷にユダヤ、イスラム、キリストの各宗教を越えた学者を集め、アラビアの優れた医学、科学、哲学などのアラビア語文献をラテン語やカスティーリヤ語に翻訳させていた。また、『七部法典 (Siete Partidas)』という法律書をカスティーリヤ語で編纂させていた。俗語であるロマンス語による書物編纂事業がヨーロッパで初めて行われたのである。14 世紀初頭には、イタリアでダンテが『俗語論』を上梓し、俗語トスカナ語 (フィレンツェ地方のイタリア語方言) の優位性を叫んだ。そして 15 世紀末、ユダヤ人とイスラム教徒の追放、キリスト教国家の統一実現、新大陸への領土拡大と、歴史が転機を迎えるに際してスペインに帝国主義の風潮が沸き起こった。

俗ラテン語からスペイン語にかけての統語論的な変化の現象として、俗ラテン語からの単純化と規則化が挙げられる。単純化の例として、格の使用を廃止して前置詞を用いるようになったこと (これは先に述べたように古典ラテン語と俗ラテン語の差異でもある)、動詞の活用形を整理して、完了形を取り入れて活用の種類を少なくしたことなどがある。規則化とは、ラテン語の自由な語順に相対的な制約を設けたことであるが、これには名詞・形容詞の格変化の消失が影響している。

音声的な側面には、f-> h-> φ (ゼロ) と公式化される変化がある。ラテン語の fabulare (話す) が現代スペイン語の hablar、ラテン語の formōsu (美しい) が現代スペイン語の hermoso に変わった例がある。また、歯擦音の現象も、中世から近代に起こった変化である。

中世にかけて起こった形態的な変化として、ラテン語にあった名詞・形容詞の曲用 (格変化) が失われたことが挙げられる。また、名詞の 3 つの性のうち、中性は完全に失われ、男性/女性の二項対立で名詞の体系が再調整された。

1 人称、2 人称複数形の主格・前置詞格代名詞は語源的には nos, vos があったが、14 世紀に不定

代名詞 *otros, otras* を加えた *nosotros, nosotras; vosotros, vosotras* が出現する。

## 8. スペイン語の産声 (primer vagido)

スペイン語が最初の産声を上げたと言われるのは、ログローニョ県サン・ミリャン・デ・コゴージャにある「下の修道院 (Monasterio de Yuso)」でスペイン語の歴史上最初の文献『サン・ミリャン修道院の註解 (*Glosas Emilianenses*)』が発見されたことによる。「スペイン語の最初の産声 (primer vagido)」とは、スペインの言語学者ダマソ・アロンソの比喻だが (Dámaso Alonso (1958))、周知のようにスペイン語はラテン語の話し言葉 (俗ラテン語) から徐々に段階的に発展した言語であり、当然のことながら特定の時間と空間の一点で突然呱呱の声を上げたというわけではない。

この文献はおおよそ 10 世紀から 11 世紀のものでされている。現在では王立歴史アカデミア所蔵の「サン・ミリャン写本 60 番」に記載されている。これは古典ラテン語の文章の欄外に、修道士たちが当時話されていた言語 (当時のナバラ・アラゴン方言) で走り書きした注記であるが、専門家によって 977 年のものと鑑定され、1977 年にスペインでスペイン語成立千年祭が催されたほどである。しかし、11 世紀ないしは 11 世紀後半 (1075 年以前) とする説もあり、研究者によって意見がまちまちであり、一定していない<sup>3</sup>。これが、ラテン語の意味を知るといふ修道士たちの意図とは反対に、後世の私たちにスペイン語の原初の形態を知る手がかりを与えてくれることになった。

例えば、「持つ」はフランス語では *avoir* (ラテン語の *habere* から) であるが、現代スペイン語では *tener* (ラテン語の *tenere* から) を使う。しかし、スペイン語でも古くは *avere* (現在の *haber*) が使われていたことがこの 10 世紀の文献から判別できる。*abete* は現代スペイン語では *tened* (*vosotros* に対する *tener* の命令形) である。

更に忘れてはいけない文献に、『シロス註解 (*Glosas Silenses*)』がある。これも『サン・ミリャン註解』のように、古典ラテン語で書かれた文献の余白に俗ラテン語を母体としたスペイン語で注釈が付け加えられたものである。『シロス註解』は 10 世紀に書かれたイベリアロマンス語最古の文献とされているが、同様にナバラ・アラゴン地方の方言の特徴を備えている。『シロス註解』は英国図書館所蔵 (1878 年パリ購入) の写本に記されている。更に、『シロス註解』が書かれたのは 11 世紀、1050 年以降という説もあるが、やはり確証はない。

さて、サン・ミリャン註解がカスティーリャ語最古の文献とされてきたが、ラ・リオハ大学教授のクラウディオ・ガルシア・トゥルサが歴史家の兄ハビエルと取り組んだ語彙集「サン・ミリャン写本 31 番」と「同 46 番」が最古ではないかとの説もある。後者には書写終了の日付が 964 年 6 月 23 日と明記されているが、内容的には既存のテキストを綿密に書写したもので、写本の史料編纂や言語上の特徴は 964 年以前のもので推定されている。約 200 葉のフォリオ大の羊皮紙から成り、25,000 ほどの語彙項目が列挙され、10 万に至る意味が収録された語彙集である。

なお、スペイン最古の文学作品は、12 世紀 (写本は 14 世紀のもので、作品自体は 1140 年頃と推定されている) に成立したとされる『我がシッドの歌 (*Cantar de Mio Cid*)』という叙事詩である。

## 9. 結語

以上、簡単ではあるが、スペイン以前から中世スペインまでのイベリア半島の言語の変遷を概観した。今後は中世スペイン以後のイベリア半島の言語の変遷も視野に入れた記述が課題となる。



参 考 文 献

- Alonso, D. (1958) "El primer vagido de la lengua española", en *De los Siglos Oscuros al de Oro*. Gredos.
- 原誠他編 (1982) 『スペイン・ハンドブック』三省堂.
- 池上岑夫他監修 (1992) 『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社.
- 小林一宏 (2005) *España: A través de los siglos* 『スペイン - 世紀から世紀へ』弘学社.
- Lloyd, C. (1987) *From Latin to Spanish-Historical Phonology and Morphology of the Spanish Language*. Memoirs of the American Philosophical Society.
- 中岡省治 (1995) 「スペイン語史」山田善郎監修『中級スペイン文法』556-589. 白水社.
- 新田増 (1999) 「スペイン語の誕生」寺崎英樹他編『スペイン語の世界』第6章. 96 - 119. 世界思想社.
- 寺崎英樹 (2011) 『スペイン語史』大学書林.

---

<sup>1</sup> 俗ラテン語 (latin vulgar) は、「無教養な」という印象を与えかねない。これを避けるために社会的、共時的な視点から「大衆ラテン語 (latin popular)」、「家庭ラテン語 (latin familiar)」、「日常ラテン語 (latin cotidiano)」とも呼ばれている。また、ロマンス諸語の通時的、歴史的な展望から「共通ロマンス語」や「古代ロマンス語」とも呼ばれる。新田 (1999 : 116) 参照。

<sup>2</sup> ラテン語のアクセントの本質については議論があり、最近では初めから一貫して強勢アクセントであったという説もある。寺崎 (2011 : 22)、Lloyd (1987 : 88) 参照。

<sup>3</sup> 『サン・ミリャン註解』が 977 年のものと推定する文献としては、原 (1982 : 152)、池上 (1992 : 169)、975 年と推定する文献は中岡 (1995 : 565) などがある。また、11 世紀ないしは 11 世紀後半と推定する文献は新田 (1999 : 109) がある。